日本共産党の地域新聞　発行所：日本共産党夕張市委員会　夕張市千代田２番地の１　TEL &FAX　52-3097　2014 年 11 月 16（日）　14889 号(1)

民報 ゆうばり

認知症になっても安心のまちづくりを！

周囲とのずれ、戸惑い、自分自身が壊れていく恐怖

『認知症学習会』開催

10月26日、ゆうばり再生市民会議主催による、『認知症学習会』が開催され、約30人が参加しました。

講師は砂川市立病院認知症疾患医療センター長、『ＮＰＯ法人中空知・地域で認知症を支える会』理事長の内海久美子先生です。

最初に長門裕之・南田洋子ご夫妻のスライドを映されました。

「介護される人も、介護する人を支えられる」洋子が僕の世話になっているように、僕も洋子によってたくさんのものを与えられている―このことを、まず忘れないで―と話し始めました。

最新の認知症検査 SPECT

最新の認知症検査ＳＰＥＣＴ（従来のＣＴでは表わせなかった血流量や代謝機能の情報が得られ、とくに脳血管障害や心疾患の診断で威力を発揮する）についても詳しく説明がありました。

外来は３カ月待ち～でも２泊３日の入院検査なら、それほど待たずにできます…と。

「ご家族がおかしい―と思っても、患者自身が大丈夫と言い張って、受診を拒む場合も多いので、そんな時には…（囲み記事『認知症ケアの基本』参照）」

九十歳で八割が認知症

最後に『認知症は、90歳前後になると８割以上の方が発症します。でも、五感や情感は鋭く豊かに残っている。ぜひ、夕張市も安心して認知症になれる地域づくりを目指してください』と参加者にエールをおくりました。

★『認知症ケアの基本』本人理解がケアの基本

…認知症の人の心理、体験している世界…

●わからないことの連続　→　不安と混乱
・思い出せない、何かがおかしい
・考えても考えてもわからない
●家事や仕事の失敗　→　自尊心の喪失
・自信がなくなる、孤独、あきらめ
●現実の世界についていけない　→　焦燥・恐怖
・周囲とのずれ、戸惑い、焦り、苛立ち
●自分自身が壊れていく　→　強い恐怖
～*認知症を持ち、懸命に*
自分らしくありたいと願っている姿～

★認知症の人とのコミュニケーションのコツ

・楽しい、普通の話題で会話を始める
・共感的な笑顔で、声かけ誘導はゆっくりと
・声量は低く、かつ柔らかな大きな声で
・目線はその人より低い位置から
・相手の話には相槌を打ちながら、相手の言葉を要約してこちらの理　解があっているか確かめる
・情報を伝えるときは、やさしい言葉でひとつづつ
・言葉だけではなく、しぐさ・眼差し・態度などで「安心」「楽しさ」「嬉しさ」の感情面に働きかける

★秘められている様々な可能性

・五感が鋭く残っている
・情感は豊かに残っている
・昔の記憶は宝物
・身体で覚えた記憶力の威力

さぽーとセンターシューパロ

5周年記念交流会

11月１日（土）はまなす会館において、「さぽーとセンターシューパロ」が、お弁当の宅配事業を始めてから５周年が経ったことを記念して、お祝いの会が開かれ、１００名を超える関係者が参加しました。

『一般社団法人らぷらす』代表の安斉尚朋代表は、挨拶の中で「障がいを持った人が、親の亡き後、地域で自立し、生活できるように―作業所が欲しい―という親たちの熱い願いの下に、“何とか障がいを持った人に働く場を”との一念で、手探りで始めた事業でした。地域の皆様や関係諸機関、親たちのご理解とご協力で、自信と誇りを持って仕事をするメンバーの姿が今ここにあることを大変嬉しく思います」と話しました。

若菜連合町内会顧問の川村実さんの挨拶、支援者の会ひろば会長のメッセージ紹介のあと、メンバーお達の紹介と続き、いよいよ昼食はバイキング。

腕をふるった料理を楽しみ、更なる発展を祈念しました。

夕張市文化協会創立６０周年
記念式典・祝賀会開催

11月８日（土）夕張市文化協会はホテルシューパロで創立60周年記念式典・祝賀会を開催しました。

式典は物故者追悼後功労者表彰に入り、前夕張市文化協会会長大島一昭氏、同協会副会長奥山正彦氏他各単位会から短歌研究会高橋一男氏、音楽協会滝口光男氏、書道連盟氏家和子さん、俳句同好会笠原文さんの６名に表彰状が渡されました。

来賓の夕張市長や議長などの祝辞やアトラクションのあと、盛大な祝賀会へと進みました。

第 71 回 建交労夕張支部定期大会
戦争する国づくりは絶対許さず

11月９日、建交労夕張支部は第71回定期大会をはまなす会館で開催し、運動方針の採択と新執行部選出をおこないました。

開会あいさつで野呂義則委員長は「安倍政権の消費税増税、生活保護費削減、医療費負担増など国民生活破壊がすすみ、さらに集団的自衛権閣議決定によって自衛隊を戦闘地域へ送り込み戦争する国になることは絶対許されない」と話しました。

来賓挨拶に立った共産党くまがい桂子市議は介護保険制度の改悪について「基準を厳しくして個人負担が増加し、利用しずらくなり、あきらめる人が増えている」と現状を語り、いっせい地方選挙やその次の国政選挙で政権交代を実現し政治を変える取り組みに一緒に頑張りましょうと訴えました。

くずさんの夕張歴史散歩⑯

夕張・飯場と坑夫　①

炭鉱を開いたが、暗い闇の地底に働く人びとを、どうやって集めたのでしょうか。

実は、夕張炭山の開坑に先立つ幌内炭山は、明治政府の大金百五十万円を投じての官業で始まり、開坑時から囚人を借り受けて労働力としました。

しかし北海道開拓の主要な労働力として、道路・鉄道・石炭と余りにもひどい酷使に批判が高まり、１８９４年（明治２７年）１２月、時の政府は囚人使役を廃止しました。

囚人労働が中止されたことによって、開発間もない炭鉱は、労働力の確保に難渋します。

１８９０年（明治２３年）開坑にあたって夕張炭山は、東北をはじめ九州の炭鉱など全国の鉱山から経験を積んだ親方に頼ります。

開坑当時、秋田から石川市太郎、九州三池から松尾国太郎＊、四国から大塚栄太郎、そして奈良義路などがその配下の坑夫たちを引き連れて入山し、飯場を張ります。

鉄道工事後そのまま残った土工や渡り友子と言われる坑夫など約１３０人が、飯場に入り開坑にあたります。

当時、夕張炭山の坑夫は、会社に直接雇われているのでなく、「飯場経営主」という請負業に雇用され、飯場主が会社から借りた棟割り長屋に居住させていました。

「飯場主」が会社から仕事を請負い、請け負った仕事に応じ坑夫を現場に送り込む一括請負人制度でした。

坑夫の賃金は会社が飯場主に払い、そこから飯場主は何％か（５～７％といわれる）をピンはねし支給します。

日々の暮らしは米味噌・酒など日用品代（通常より２割ほど高い）すべて前貸しで、賃金からの天引きでした。

＊　末広墓地には松尾国太郎の墓がある。